

## 60

## 江戸前期の医学辞典における収録病證の変遷

永嶋 泰玄, 岩田源太郎, 大井 康敬, 杉浦 雄

日本鍼灸研究会

日本近世の慶長・元和年間以前における、辞書形式での漢語医学関係用語（身体部位及や病證用語）の解説は、20巻本『倭名類聚抄』形体部や『下学集』支部部などに一定のまとまった例があるを除けば、『色葉字類抄』から『日葡辞書』まで、概ね一般語に混じって散見するに過ぎない。専門的な医学用語辞典の登場は、日本近世医学が隆盛した江戸期以降のことで、その先駆が1600年代に出た『病論俗解集』と『病名彙解』である。

著者未詳の『病論俗解集』は江戸前期の1639（寛永16）年に、蘆川桂洲の『病名彙解』は江戸中期に入ったばかりの1686（貞享3）年に刊行された医学用語辞典である。両書共に病證用語をイロハ順に配列し、用語の大半に振り仮名を附し、概ね簡単な和文で解説されている。この書式は両書の性格を暗示している。『病論俗解集』には1,066語が収められているが、身体部位名や日常用語もかなり含まれており、病證用語は約600語、5割強に過ぎず、かつ病證の解説も簡略で、病の機序にまで踏み込んだ解説は少ない。他方『病名彙解』には1,745語が収められており、かつその全てが病證名や病名である。病證の解説は詳しく、病の原因、機序についても多くの言葉を費やして解説がなされている。また『素問』『三因方』『医学入門』『医学正伝』『外科正宗』など、明代までの多くの中国医書からの徴引が積極的になされていることも大きな特徴である。

本研究は、この二書に収録されている病證用語を比較検討することにより、江戸前期の医学辞典における収録病證の変遷とその背景を明らかにしようと試みるものである。

『病論俗解集』『病名彙解』両書共に見られた病證は、一部表記の重なった語（遺尿失禁と遺尿、風水毒腫と毒腫等）も含め、約200語であった。これは『病論俗解集』においては病證用語全体の三分之一、『病名彙解』においてはその約一割を占める。両書共に見られた病證においては、「胃反」については「霍乱ニ胃反ノ一證アリ。」「霍乱ノ別名ト云ウ。」、「吐逆」については「ハキカエス。」「食物ヲハキカエスナリ。」、「胎動」については「胎内ノ子腹ノ中ニテイゴクナリ。」「妊娠ノ中胎動テ病ヲ為ス。」などのように、多くは同じ内容の解説がなされている。一方、たとえば「嘔吐」について、『病論俗解集』では「声有ヲ嘔ト謂イ物有ヲ吐ト謂ウ」と簡単に症状を解説するだけであるが、『病名彙解』では「胃虚ニ属ス」と病證の解説を行った後、『三因方』や『医学正伝』から引用を行い、「寒嘔」「熱嘔」「痰嘔」「食嘔」「血嘔」「気嘔」など、嘔吐と関連の深い病證を採録し、総括的に解説を加えている。また『病名彙解』では「心悸」の中に、同義である「心忪」を取めているが、『病論俗解集』では「心悸」と「心忪」を別々に記載するなど、同じ意味を持つ語に対する取り扱いにかなりの違いがある。

『病論俗解集』は、江戸初期から前期の近世医学黎明期において、中国医学の初学者に対し、病證を含む医学用語を初歩的に学習するために著されたものと言える。一方『病名彙解』は、初学者からの需要というよりもむしろ、天和貞享年間頃の医学の大衆化を背景に、大量に現れてきた一般医家の専門的要求に応える目的で著されたものである。そうであるからこそ、和語によるとはいえ、多数の中国医書の援引を土台に、『病論俗解集』よりも一層細分化された病證を多数収載し、病證相互の関連性に関する情報も加味することにより、日本で最初の本格的な医学用語辞典となり得たと考えられる。